

第 1 章 台東区の景観特性

台東区は、自然的資源や歴史的資源、文化資源など多様な景観資源が集積しております。これらの景観は人々の生活や活動に溶け込み地域の特性として受け継がれており、区民の生活を基調にしながら新旧調和した台東区らしい景観を創造していくことが大切です。

この章では、台東区の景観特性を分析し「景観のまとまり」を分類するとともに「拠点的な地域」の抽出を図ります。

1. 台東区の景観構造

(1) 都市形成の背景となってきた景観の構造

1) 山（台地）と水を重視し、地形の特徴を生かしてつくられたまち

台東区は本郷台地の東辺、上野台地、隅田川沿いの微高地に形成された市街地であり、これらを活かして特に江戸期以降に「まち」として形成されたことから、以下に示すような特色ある構造を有しています。

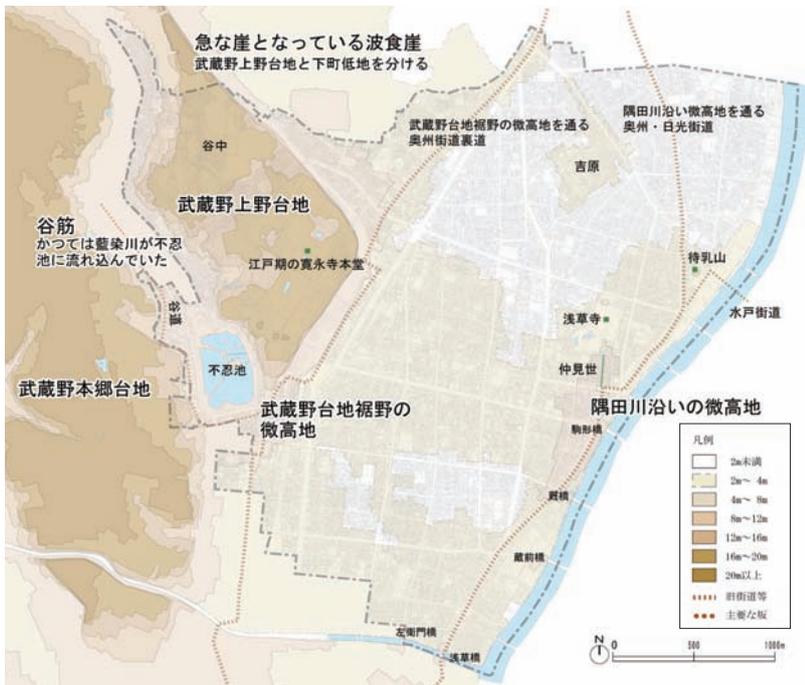
- 区内の大半は標高 0m 以上であるが低地ではしばしば水害も起こったため、隅田川沿い及び日光街道沿いの微高地に、旧街道と沿道の町人地（職人）や、主要寺社と門前町が形成されました。また、根岸周辺や隅田川沿い（橋場）は台地と川の自然環境に支えられた別荘地としての一面も持っていました。
- 高低差の小さい江戸では、上野台地を「山」と呼んできました。奥州街道裏道の西側の高燥¹の地である上野台地（標高 20m）には、幕府の祈祷寺・菩提寺²として上野寛永寺が造営され、谷中寺町が形成されました。
- 上野台地を除き、ほぼ平坦な地形の中に自然にできた待乳山（標高約 10m）は、周辺から独立した三等三角点をもつ山で、飛鳥山や上野の山といった“丘”とは異なります。「日本山名辞典」（三省堂）では都内最低峰の山とされており、名所図絵の点景として描かれている他、古くは筑波山等を望む視点場として衆知されていました。
- 南北崖線軸の一部をなす上野台地の崖線緑地や本郷台地の緑地の連なり等の、崖線を縁取る緑が形成されています。



図 1-1 江戸期の都市構造（出典：幕末の大江戸トリミング）

1 土地が高く湿気が少ないこと。

2 祈祷寺は加持祈祷や祈願を行う寺。菩提寺は家が代々帰依し、菩提を弔う寺。



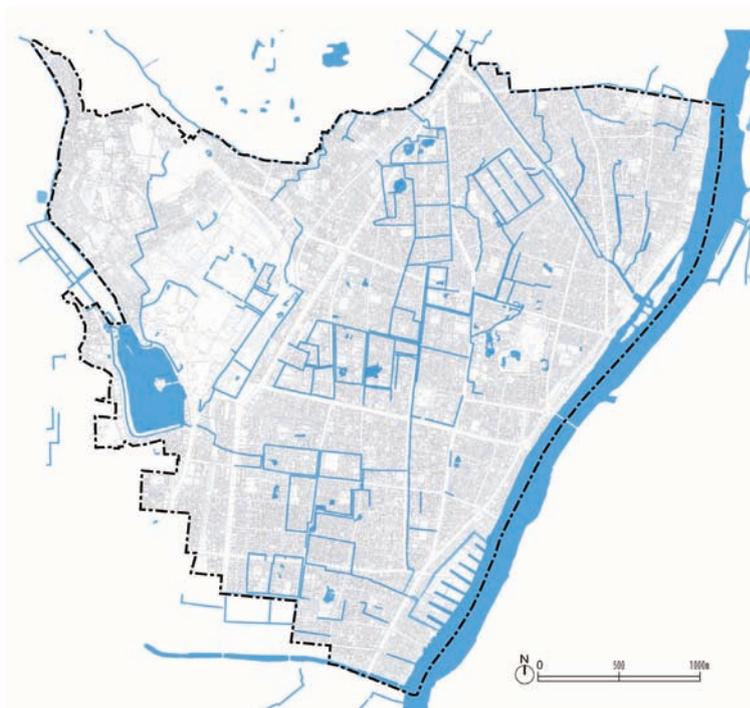
▲上野の山（不忍池より）

▼上野の山（上野駅より）



図 1-2 台東区の地形

- ・江戸期には多くの水路が張り巡らさせていました。
- ・隅田川（大川）や谷田川（藍染川）、不忍池といった水や川の景観的風情が非常に愛されてきました。
- ・不忍池は、東京湾の入り江が取り残されてできたもので、江戸期の弁天堂建立を経て蓮見の名所、遊興地として繁栄しました。
- ・隅田川では、美しい橋や船の往来、花火大会など水辺の風景が人々に愛されてきました。また水運が発展し、交通の要所として栄えました。
- ・神田川は、江戸期に自然の川の付け替えにより外堀とされ美しい橋や屋形船などの風景が人々に愛されてきました。
- ・隅田川、不忍池、山谷堀などは、水辺空間や風情などを楽しむ行楽地として浮世絵などに描かれました。



▲隅田川

▼神田川

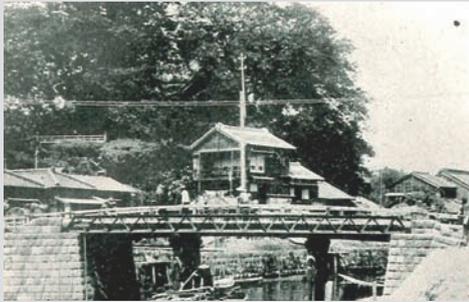


図 1-3 江戸期の水網分布

これらの地形構造は視覚的にとらえることができますが、次のような景観要素が消滅、埋没した事により、明確であった景観構造を視覚的に感じとりにくくなっています。

- ・区内に張り巡らされていた水路が、現在は暗渠化や埋め立てで多く失われました。
- ・地形を特徴づけていた斜面は、建築物の高層化などにより、それらを視認しにくくなっています。

■暗渠化し、上部が緑道となった山谷堀



▲明治末期（出典：「東京名所画帖」）



▲現在

■埋め立てによりなくなった三味線堀



▲明治期（出典：「新撰東京名所図会」山本昇雲）



▲現在

■隅田川沿いから見えづらくなった待乳山



◀江戸期

（出典：「名所江戸百景」歌川広重
東京都江戸東京博物館所蔵）



▲現在

2) 現代に生きる都市構造

江戸の墨引線（江戸町奉行管轄地）は現在の台東区北側区域界とも概ね一致し、江戸城下の都市部、郊外部の境界部分にあたります。これにより都市性と自然性を併せ持つ、景勝豊かでのびやかな市街地を形成してきました。また、図に示すように、大名屋敷（上・中・下屋敷全て）は南部に、北部には主に町人地や寺社地が配されました。その後、江戸から首都東京への変化や、震災と復興区画整理事業、戦後の発展により景観も大きく変化しましたが、歴史や伝統的文化を否定することなく、古き良きものを活かしながら個性的な台東の景観が培われ、現代にも息づいています。

- 第1期下町³の日本橋は上方の商人のまちで、神田から以北の第2期下町⁴は江戸っ子の職人の町人地が中心でした。職住近接の暮らしは、江戸期からの続く住まい方と言えます。
- 水運や街道などの交通の要所であったため、隅田川近辺や大通り沿いには、問屋街が形成されています。
- 谷中から上野、浅草まで、江戸城の鬼門（北東）であったため、図に示すように戦略的に寺町が配されていました。谷中、上野～松が谷周辺、浅草寺、今戸などが現在でも寺町として存在し、山門や築地塀、敷地内の緑等が区の景観を特徴づけています。
- 上野の寛永寺と浅草の浅草寺をつなぐ御成道が整備されたことから、上野と浅草は密接な関係にありました。日本を代表するこれらの地域はともに、盛り場と名所行楽地の共存する魅力的な観光地として栄え、現在に至っています。
- 街道、大路、小道、横町、路地など「みち空間」はまち並みと密接な関係を持ち、特に小さな道などはコミュニティの場でもあり、祭りの時にはくまなく御輿がまわる重要なパブリックスペースとなっています。
- 震災や戦災により、江戸期の街並みの大半が失われましたが、区の北西部は震災や戦災を免れた地区が多く、昔ながらの落ち着いた雰囲気が感じられます。
- 震災や戦災の復興による基盤整備は、江戸期からの道を活かしながら整備が行われた結果、現在もその名残をみることができます。

3 江戸時代初期～中期にかけて「日本橋川筋より北の方、神田堀内に属する町名、并（ならび）に里俗（りぞく）の呼名、此辺（このあたり）おしなべて下町と云（い）う。…下町は御城下町と称せる略なるべし」（御府内考）、「神田より新橋の辺迄（あたりまで）を下町といふ。」（江府名勝志）とあり、町人地として形成され千代田区～中央区の地域が下町とされた。（出典：雑誌アクロス 88/12）

4 江戸時代中期～明治期にかけ、下谷、浅草、芝また江東区にも町人地が拡がり下町が拡大した。江戸期～戦後高度成長期にかけ、こうした下町の拡大について第1～4期までと分類されている。（出典：雑誌アクロス 88/12）

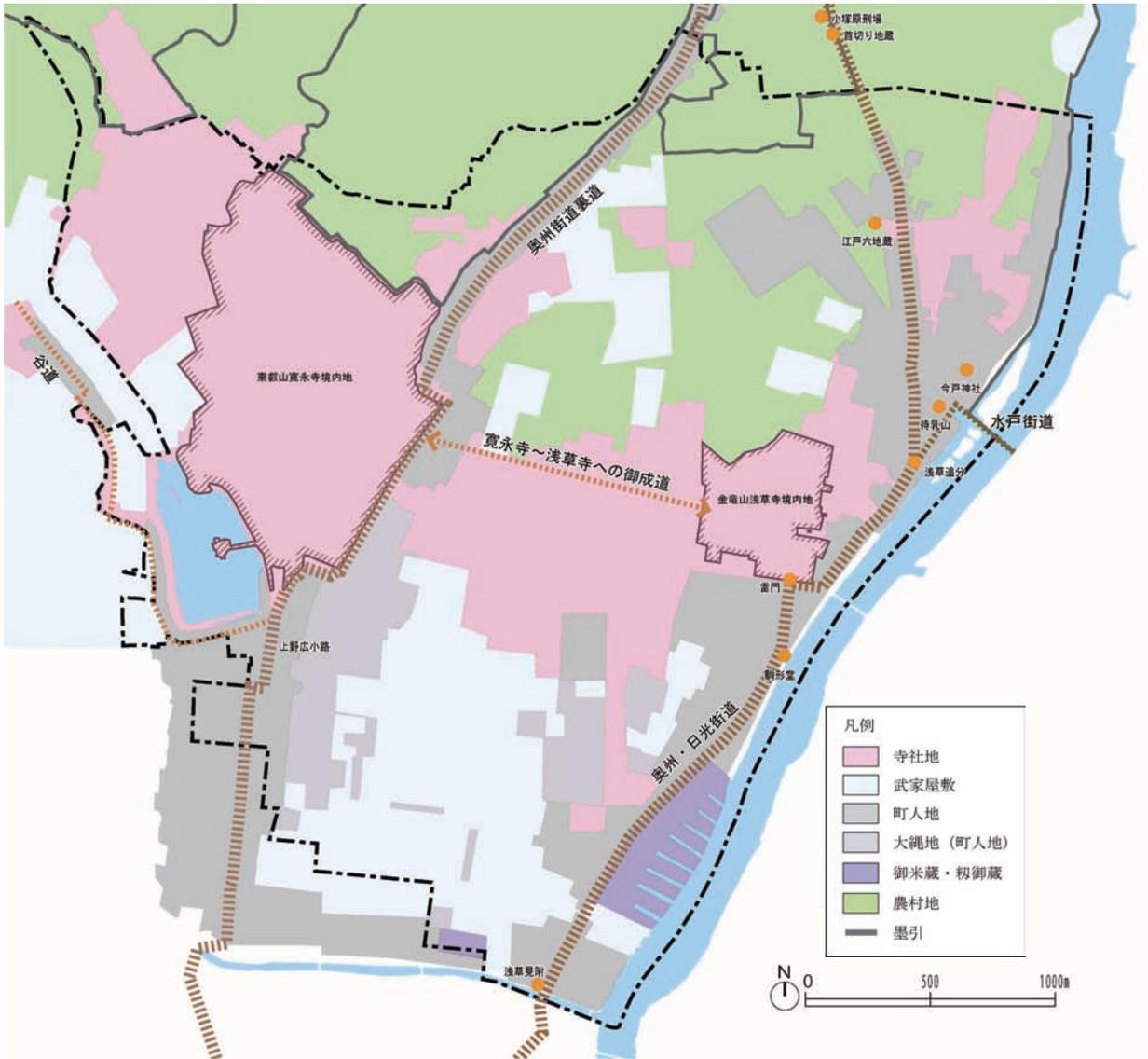


図 1-4 江戸期の町割による都市構造

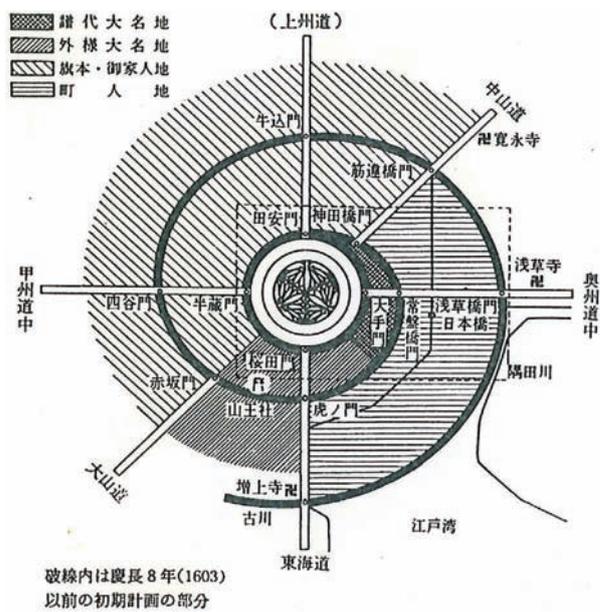
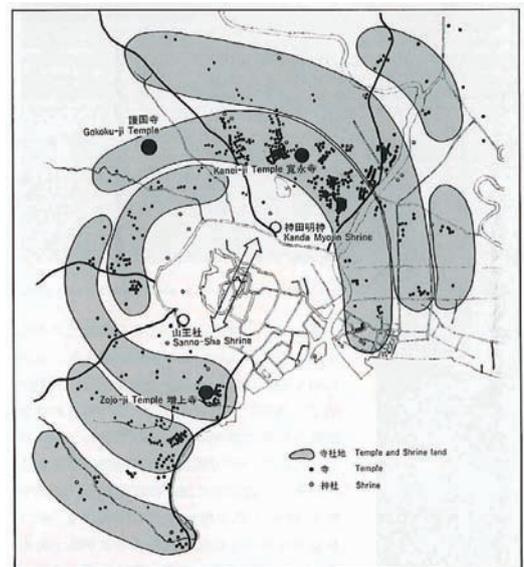


図 1-5 江戸城下町の概略的構造 (出典：江戸と江戸城)
(虎ノ門～台東区にかけ、町人町が配置されている。)



寺社地の配置 江戸城を取り囲んだ呪術的構造をなしている。
Temple and shrine land allotted by the shogunate: a belt of supernatural protection around Edo Castle.

図 1-6 寺社地の配置 (出典：東京エスニック伝説)

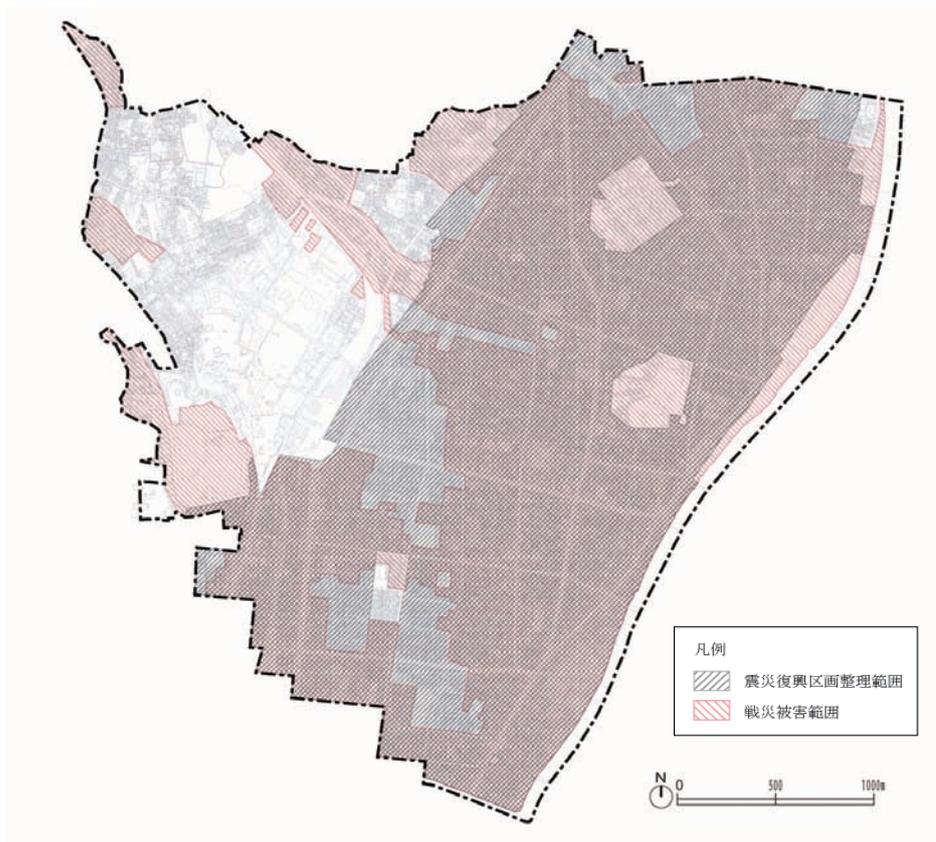


図 1-7 震災復興区画整理、戦災被害範囲重ね図
 (大正 12 年の関東大震災は台東区に大きな被害をもたらし、震災復興は帝都復興区画整理事業として昭和 5 年まで行われた。また昭和 14～20 年の第二次世界大戦においても多くの地域に被害がもたらされ、区の大半が震災と戦災の被害を受けたことがわかる。)

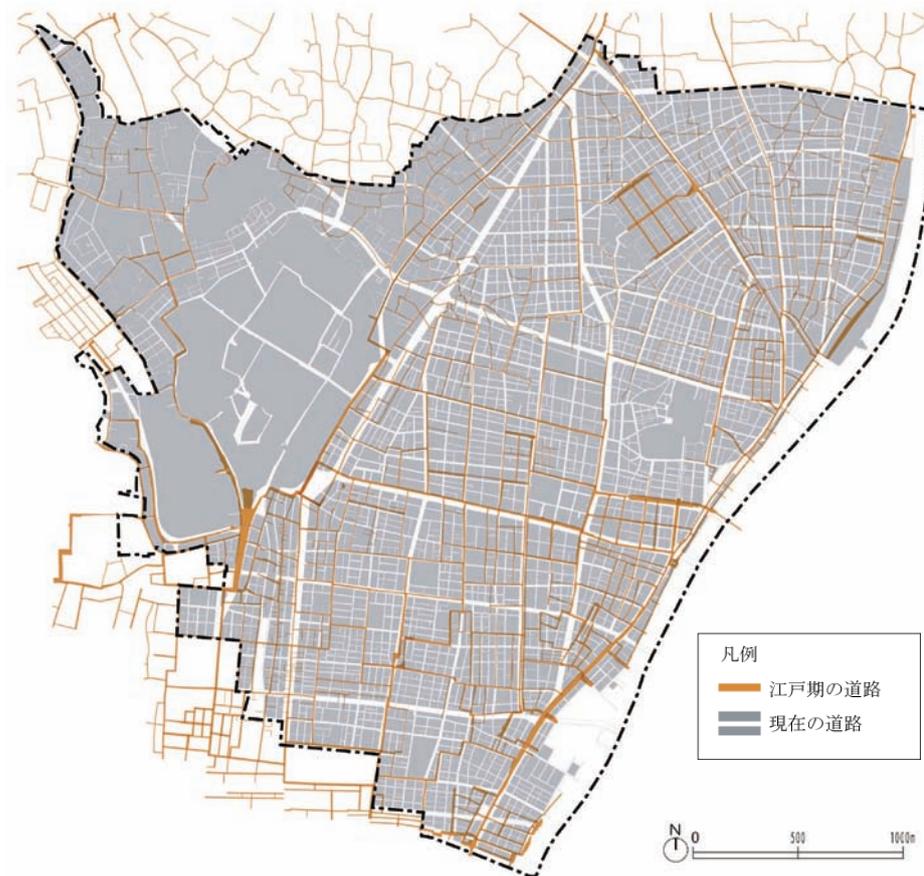


図 1-8 江戸期と現在の道路網
 (震災復興区画整理や戦災を経つつ江戸期からの道路網が多く残っている。)

(2) 台東区らしい景観の背景となってきた文化的特性

1) 江戸期から続く日本を代表する数々の名所と賑わいや交流の場

台東のまちは前述のような地形や都市構造の特徴により、主に江戸期から浅草寺、不忍池をはじめ日本を代表する数々の名所、賑わいや交流の場が多く誕生しました。江戸期以降も指折りの名所・盛り場として発展してきました。

- 名所江戸百景(安藤広重作)では下谷広小路、上野清水堂不忍ノ池、上野山した、浅草金龍山、猿わか町よるの景など、多くの名所が描かれています。
- 江戸の名所番付表には、「横綱」の浅草寺を筆頭に、大関「上野四季絶景 忍ヶ岡」と「隅田川(向島界限)」、小結「待乳山」、前頭の「不忍ノ池」が選ばれています。
- 新東京百景(昭和57年、都民より公募)でも、台東区では浅草寺と仲見世、上野公園、隅田公園が選ばれました。
- 台東区では思い出の景観30選(平成14年)が選定されました。
- “寛永寺・上野公園、谷中の街並み”地域が「美しい日本の歴史的風土100選(平成19年)」に選ばれました。

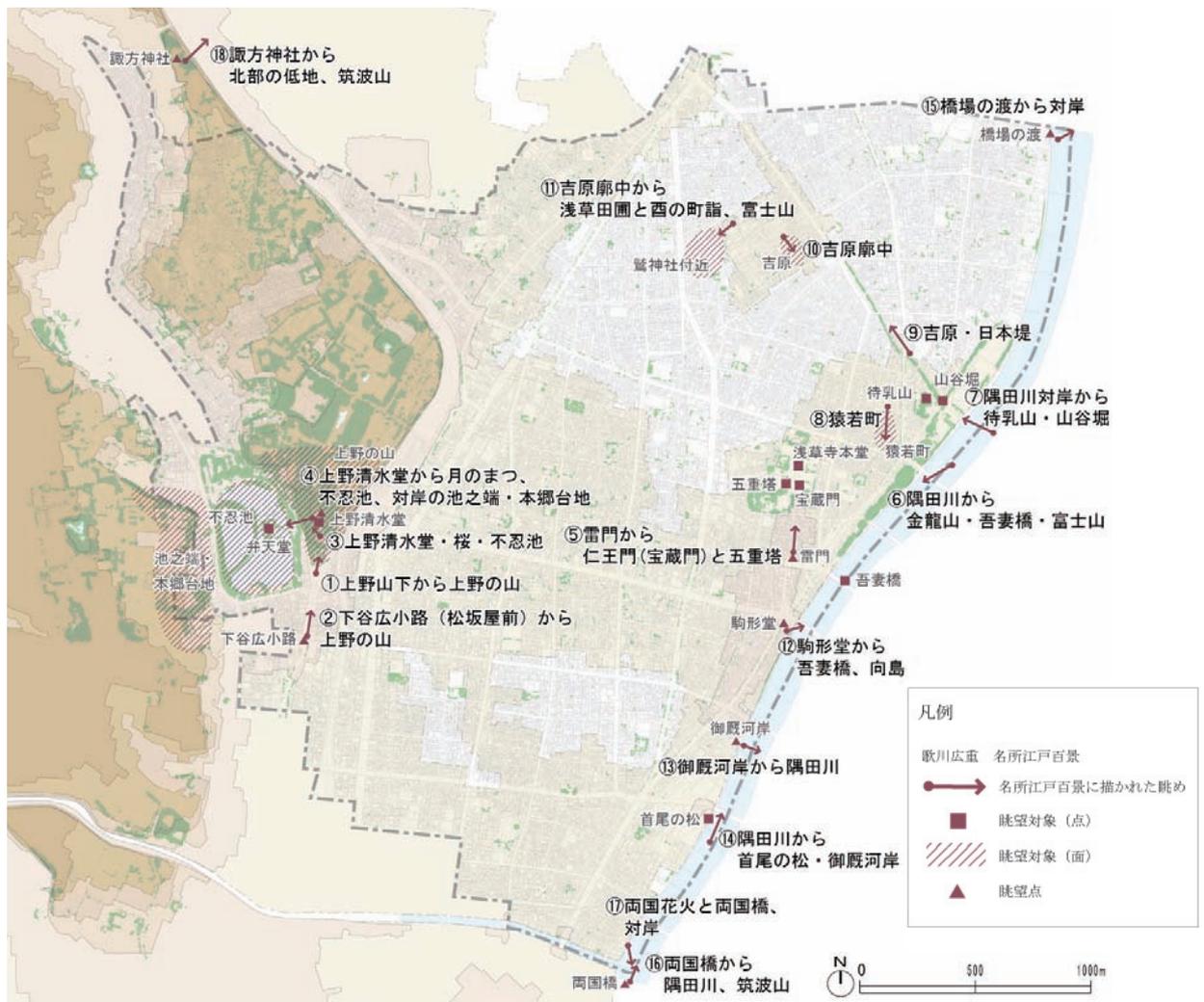


図 1-9 江戸期の主な名所位置図

2) 古代から地域に根付いていた主要神社

待乳山聖天(595年)、浅草神社(628年)、鳥越神社(651年)、下谷神社(730年)小野照崎神社(852年)と古代から創設された古い神社が今でも市民に支えられ、神社氏子地域はほぼ明確であり、旧町域とかなり近く、今日においても重要なコミュニティ単位として継承されています。

全国でも有名な三社祭、鳥越例大祭(夜祭り)、下谷例大祭といった神輿で有名なお祭りをはじめ、神社毎の例大祭等のお祭りがコミュニティ活動のハイライト、さらに区の観光資源とも言え、神社や祭りルートは区民、来街者にとって重要な季節の景観資源となっています。

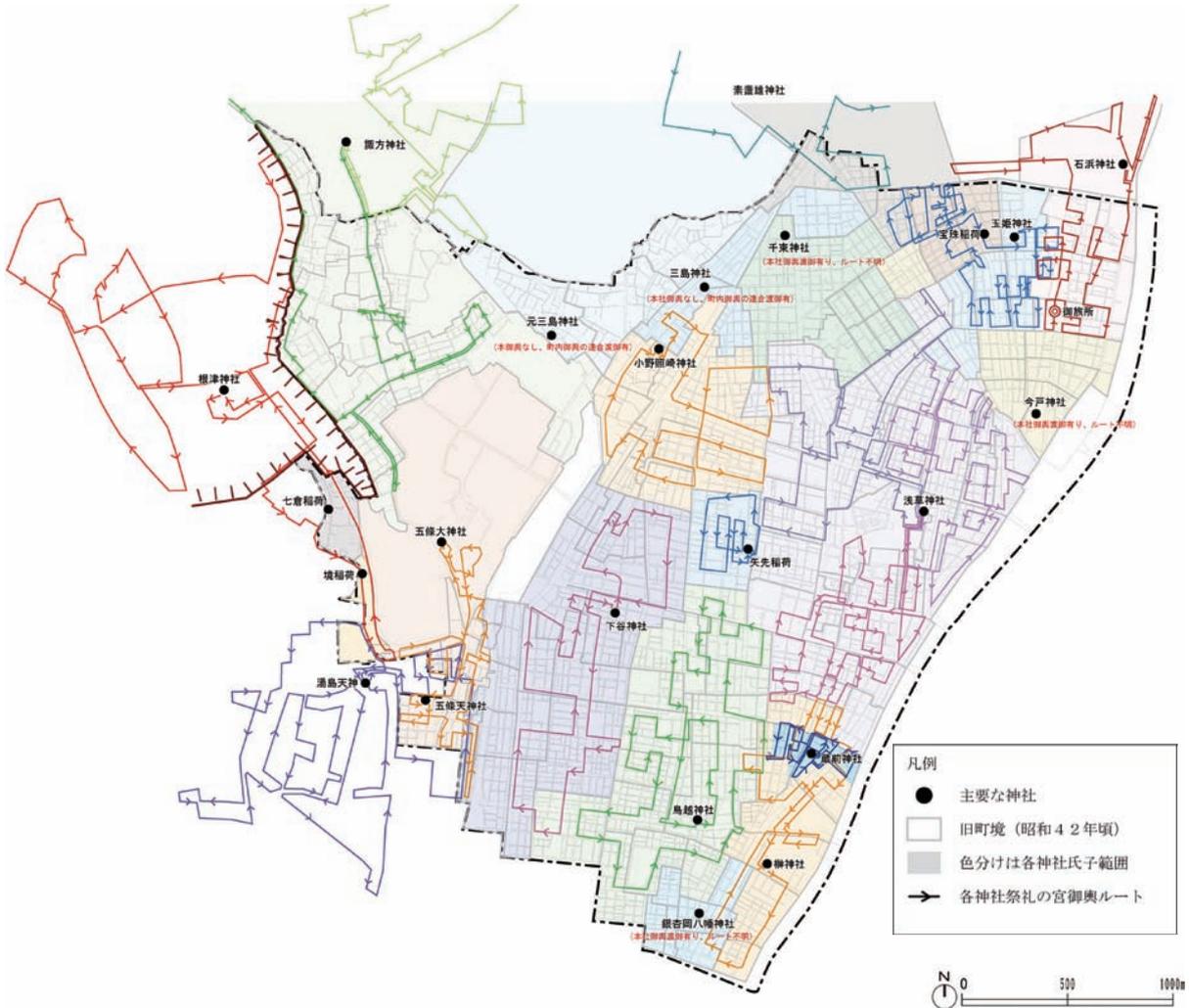


図1-11 主な神社と神社圏域、祭りの御輿ルート(※氏子範囲、御輿ルートは把握できた範囲で掲載)



▲ 下谷神社例大祭



▲ 鳥越神社例大祭(鳥越祭)



▲ 三社祭

3) お祭りと市で一年中にぎわうまち

台東区では数多くの大祭や例祭等が行われており、地域コミュニティや観光資源として賑わいをもたらしています。

■主な季節の行事

こよみ（旧暦）		行事と景観
春	1月 睦月	初詣、とんど焼（鳥越神社）、大根まつり、まないた開き
	2月 如月	節分・福聚の舞 初午の稲荷神社の縁日（下谷稲荷、千束稲荷、浅草玉姫稲荷） 火事に備えた火除地（上野広小路、雷仲門前広小路）
	3月 弥生	花見（上野公園、隅田公園他）、金龍の舞
夏	4月 卯月	こんこん靴市（玉姫稲荷を氏子とする近隣の靴関連業者が実施） ぼたん祭り（上野東照宮）、浅草流鏝馬、白鷺の舞
	5月 皐月	三社祭、下谷神社大祭、五條天神社大祭、花園神社例大祭 お富士さんの植木市
	6月 如月	鳥越神社例祭
秋	7月 文月	浅草富士浅間神社の富士山山開きと縁日、あさがお市（真源寺－入谷鬼子母神） 七夕まつり（かっぱ橋本通り）、うえの夏まつり、ほおずき市（浅草寺） 隅田川花火大会
	8月 葉月	不忍池の蓮見（7月中旬～8月中旬）、浅草サンバカーニバル、谷中円朝まつり 台東薪能
	9月 長月	聖天祭（待乳山開山記念日）、人形供養
冬	10月 神無月	谷中まつり、谷中菊まつり、金龍の舞、菊供養
	11月 霜月	酉の市※（鷲神社）、白鷺の舞、東京時代まつり、一葉祭
	12月 師走	歳市の市（羽子板市－浅草寺）

※酉の市は、「酉の町」「酉の祭」とも呼ばれています。



▲入谷鬼子母神の朝顔祭



▲浅草寺のほおずき市



▲鷲神社の酉の市

4) 古いものを大切にしつつ斬新なものを生み出してきたまち

盛り場として栄えた歴史は、古いものを大切にする一方で、進取の気性に富み、特に上野、浅草では常に先進的な建築デザイン、ランドマーク、イベント・興業が考案され、まち並みは重層的で多彩な魅力を有するようになりました。また、現在でも図や写真に示すように、区内には多くの歴史的建造物等が点在しています。

- 明治になると寛永寺の境内地の一部が上野恩賜公園として整備され、明治から大正にかけて博覧会や競馬など多くの催し物が開催されました。博覧会の際に建設された施設が、美術館、博物館、動物園となり、文化施設が集積する地域となりました。
- 浅草寺周辺では、江戸期に吉原の遊郭や猿若町の歌舞伎小屋、明治から大正には浅草六区興行街がつくられました。「浅草公園六区」という名称は、明治・大正・昭和にかけて東京の娯楽の代名詞として親しまれました。
- 明治23年から関東大震災まで浅草十二階で親しまれていた「凌雲閣(高さ約52m)」は明治大正期のランドマークであり、展望の場として数々の小説や絵葉書、絵画に登場し、地域のシンボルでありました。昭和29年に凌雲閣に模した「仁丹塔」が建設され、その後、昭和61年に解体されました。
- 眺望の名所「待乳山聖天」は、周辺の平坦に地形の中に浅草唯一の台地として存在しています。

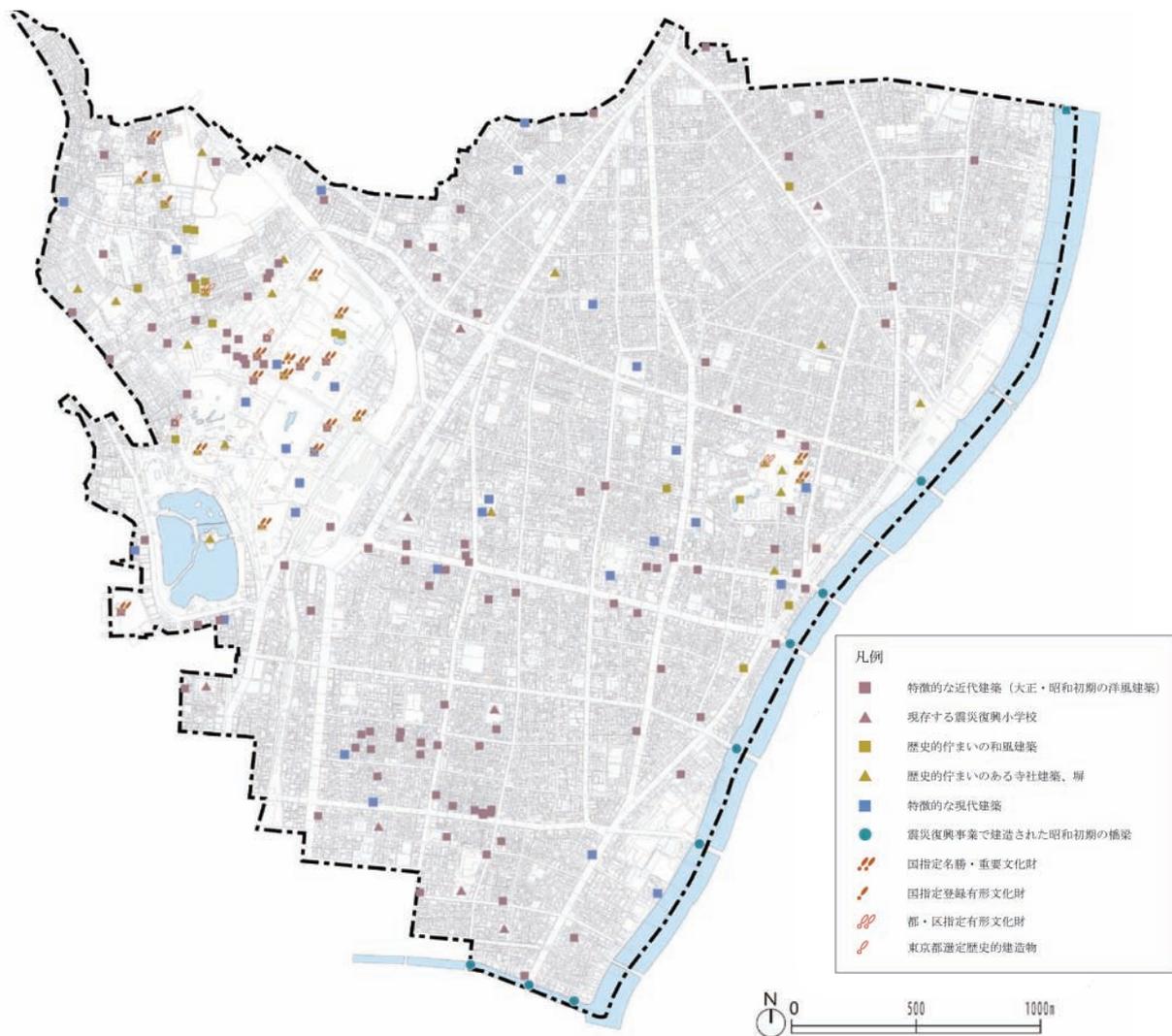


図 1-12 歴史的建造物分布図
(台東区景観資源マップ、日本建築学会「歴史的建築総目録データベース」を参考に作成)



▲ 浅草神社 (重要文化財)



▲ 旧岩崎邸 (重要文化財)



▲ 国立西洋美術館 (重要文化財)



▲ すべす小倉屋
(登録有形文化財 [建造物])



▲ 朝倉彫塑館
(登録有形文化財 [建造物])



▲ JR上野駅



▲ 旧吉田屋商店 (移築保全し公開中)



▲ 旧小島小学校
(現 台東デザイナーズビレッジ)



▲ 国際子ども図書館



▲ 待乳山聖天



▲ 池之端の大谷石の工場



▲ 伊勢屋と中江
(登録有形文化財 [建造物])



▲ 花川戸の小料理屋



▲ 上野の近代建築



▲ タイガービルヂング
(登録有形文化財 [建造物])



▲ 隅田川に架かる個性的な橋梁群



▲ 厩橋



▲ 柳橋

